

自己評価報告書

平成23年4月25日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520121

研究課題名(和文) ジェルジ・リゲティ研究：中東欧音楽史の視点から

研究課題名(英文) György Ligeti as a composer from Eastern Europe

研究代表者

伊東 信宏 (ITO NOBUHIRO)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：20221773

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：リゲティ、中東欧音楽、ハンガリー、ルーマニア、民俗音楽

1. 研究計画の概要

本研究課題は、20世紀後半を代表する作曲家の一人、ジェルジ・リゲティ(1923-2006年)について、その創作を彼の文化的背景である中東欧音楽の文脈のなかで明らかにしようとするものである。具体的には、(1)幼少期から学生時代にかけてのリゲティの音楽的環境を明らかにし、そこでの民俗音楽の役割などを検討すること、(2)第二次大戦後の「前衛音楽」のサークルにおけるリゲティの位置を、ブレイズやシュトックハウゼンを参照軸としながら明確にすること、(3)リゲティ自身の「ヨーロッパ音楽」理解を彼の著作や音楽作品の分析によって明らかにすること、を目指す。そして、最終的にこれらを総合する論点として(4)リゲティ唯一のオペラ《ル・グラン・マカーブル》を中心とする彼の諸作品を、中東欧音楽の視点から解釈することで、これまでとは次元の異なる作品理解を導く、というのが本課題の目的である。

2. 研究の進捗状況

上記、(1)については、リゲティの生地、トランシルヴァニアなど、あるいはリゲティが学生時代に過ごしたブダペストなどで調査を行い、これまで知られていなかった彼の文化的背景についての情報を得た。

(2)戦後の「前衛」におけるリゲティの位置については、パリ、ダルムシュタット、ケルンにおけるリゲティ本人、およびシュトックハウゼン、ブレイズ等の活動とその交流について、近年続々と刊行されつつある資料集などを収集し、さらにリゲティによるブレイ

ズ作品の分析から、彼のトータルセリエリズムに対する見解を検討した。

(3)リゲティ自身のヨーロッパ音楽理解については、彼が古典音楽について書いた分析論文を精読し、訳稿を作った。

(4)オペラ《ル・グラン・マカーブル》については、まず先行研究の整理を行い、とりわけ原作(Michel de Ghelderode: *La Balade du Grand Macabre*, 1935)が、その独語訳(1966年)を経て、オペラの台本へと変化してゆく過程について、Peter von Seherr-Thossの優れた博士論文 *György Ligeti's Oper "Le Grand Macabre"* (1998)を参照しながら、検討している。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進行している。

(理由)

2009年度の調査が、研究協力者の都合などにより延期となり、2010年度にずれこんだが、それ以外の点については、ほぼ計画どおりに進んでいる。今年度、研究報告をまとめ、本研究終了後に本格的な著作を刊行することを目指している。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は、4年間にわたる本研究課題の総括を行い、報告書を刊行することを予定している。

(1)については、まず昨年行ったリゲティの生地における調査、およびクルージュ・ナボカ(ルーマニア)における学生時代の記録な

どを整理し、時系列にそってまとめる。

またハンガリー期については、ブダペストのリスト音楽院の記録などを中心に、伝記的記録を整理し、さらに Rachel Beckles-Wilson の著書を参照しながら、当時の社会状況についてもまとめる。また、この時期最もリゲティに近い立場にあったクルターグについて、インタビュー集の翻訳刊行を行う。

(2) 亡命後の状況については、これまでに訳稿を作ったリゲティによるブルーローズ作品の分析について、詳細な検討を加える。

(3) リゲティ自身のヨーロッパ音楽理解については、昨年訳稿を作ったリゲティによるモーツァルトの弦楽四重奏曲「不協和音」の分析を再検討し、報告書に掲載する。

(4) オペラ《ル・グラン・マカーブル》については、上記の Seherr-Thoss の著書の検討を進め、分析を継続し、論文をまとめる。

以上のほか、幼年期の悪夢をきっかけとして書かれたリゲティの作品に関する論考を『文学』に寄稿する予定であり、これも報告書の一部として加えることを計画している。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①伊東信宏「トゥルナヴェニ：リゲティの生家」(日本室内楽振興財団機関誌『奏』34, 2010年、pp. 13-14、査読無)

②伊東信宏「バルトーク《4 4 の二重奏曲》の成立：ドフラインとの書簡を中心に」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 50 巻、2010年、pp. 69-89、査読無)

[学会発表] (計 10 件)

①Nobuhiro ITO, Where chalgа was born: a geopolitical sketch of Bulgaria's pop-folk music, at *International Workshop OSAKA- PRAHA 2011*, Between "National" and "Regional" Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures (21st March, 2011, Faculty of Philosophy, Charles University Prague, Czech Republic)

[図書] (計 2 件)

①伊東信宏 (単著) 『中東欧音楽の回路：ロマ・クレズマー・20 世紀の前衛』(岩波書店、2009 年 3 月、全 217 頁)

②共著、山田陽一編『音楽する身体：〈わたし〉へと広がる響き』(昭和堂、2008 年、伊

東信宏「ロマの楽師に成る：エネスクにおけるヴァイオリンを弾く身体」pp. 69-86 を担当)

[その他]

小論考など (計 10 件)

①伊東信宏「コパチンスカヤと L 氏：あるディレクターの横顔」(『紫明』第 24 号、2009 年、pp. 42-46)